

「一方」という形式にみられる「する」と「やる」の差異について

森川 結花 (甲南大学 国際言語文化センター) †

小山 宣子 (弘前大学 国際教育センター)

浜田 秀 (天理大学 文学部)

The Differences between “Suru” and “Yaru” When in the “-kata” Form

Yuka Morikawa (Konan University, Institute for Language and Culture)

Nobuko Oyama (Hirosaki University International Education Center)

Shu Hamada (Faculty of Letters, Tenri University)

1. はじめに

「する」の類義語の「やる」は、日本語学習では初級段階で導入される基本語彙の一つである。現行の主な日本語初級教科書を見ると、「やる」が会話文や例文中に使われている頻度は、『初級日本語「げんき」I』『同II』で合計7、『みんなの日本語初級II』は13、『できる日本語初級』は18¹で、学習段階の初期から学習者に「やる」を定着させようという意図が感じられる。しかし、「やる」と「する」をどんな場合にどう使い分けたらよいか、どの教科書にも明確な説明記述はない。

「やる」には「野球をやる」「ゲームをやる」のような「する」と言い換え可能な用法も多数あるが、「英語をやる」「音楽をやる」「テレビでドラマをやっている」「若い頃に結核をやった」のように「やる」独特のヲ格名詞との組み合わせもある。このコロケーションを可能にする「やる」の本質とはどういうもので、それは「する」とはどう違うのか。その答えを見つけようとするのが、本研究の元々の出発点であった。

そして、「現代書き言葉均衡コーパス」BCCWJ中に「する」と「やる」がどのような違いを見せつつ存在しているかという観点からデータを観察していく中で、「名詞をする」「名詞をやる」が「名詞のし方」「名詞のやり方」という文型をとったときに顕著な差異が現れるということを確認した。管見の限りでは、「一方」という文型に現れる「する」「やる」を比較した先行研究はない。そこで、本研究が確認した「名詞のし方」「名詞のやり方」の差異について報告することにする。

2. 先行研究

これまでに「する」と「やる」を比較対照した先行研究はいくつかあるが、その中でも特に大塚(2002)と金子(1985)の研究成果を踏まえておきたい。以下にその概略を述べておく。

2. 1 大塚(2002)

大塚(2002)²では、ヲ格名詞と「する」と「やる」の組み合わせについて、(1)ヲ格名詞の性質(動作性か非動作性か)と、(2)「する」「やる」に機能動詞性がどの程度認められるか、或いは実質動詞的かという観点から、「する」「やる」の用法と性質の連続性が一つの表にまとめられた。それを次ページに表1として引用する。

† morikawa @ center.konan-u.ac.jp

¹ ただし、『できる日本語初級』では「やる」を「どうやってチケットを買いいますか」のように、「どうやって」に限定している。『みんなの日本語初級II』でも「どうやって」が4回使用されており、理由を問う「どうして」と意図的に対照してあるように見受けられる。

² 大塚には大塚(1999)を始めとして一連の「やる」「する」を対象とした記述的な研究があるが、本研究では特に大塚(2002)に絞って議論を進めることにする。

表1 「する」と「やる」の動詞機能の連続性とヲ格名詞の性質 (大塚(2002)より)

| 動詞の機能 | ヲ格名詞の種類 | ヲ格名詞の性質 | する | やる | 実質的意味 | 単独 |
|--------|---------------|---------|----|----|-------|----|
| 機能動詞 強 | 「遊戯・スポーツ」 | 動作性 | ○ | ○ | 無 | 不可 |
| | 「趣味・習い事」 | 動作性 | × | ○ | 無 | 不可 |
| | 「映画・演劇・放送番組」 | 動作性 | × | ○ | 無 | 不可 |
| | 「様相・様子」 | 動作性 | ○ | △ | 無 | 不可 |
| | 〃 | 非動作性 | ○ | × | 無 | 不可 |
| | 「生業」 | 動作性 | ○ | ○ | 有 | 不可 |
| | 「行事・集団活動・催し物」 | 動作性 | ○ | ○ | 有 | 不可 |
| | 「役職・役割・役柄」 | 動作性 | ○ | ○ | 有 | 不可 |
| | 「学問・科目」 | 非動作性 | △ | ○ | 有 | 不可 |
| | 「着装物・付帯物」 | 非動作性 | ○ | × | 有 | 不可 |
| 弱 | 「映画・演劇・放送番組」 | 非動作性 | × | ○ | 有 | 不可 |
| | 「嗜好品」 | 非動作性 | × | ○ | 有 | 可 |
| 実質動詞 弱 | 「人・動物」 | 非動作性 | × | ○ | 有 | 可 |

大塚(2002)は、「する」は機能動詞性が強い動詞であるが、「やる」の方は名詞との組み合わせによって、機能動詞性の強いときもあればそれが弱いときもあり、場合によっては実質動詞として単独(ヲ格名詞なし)で用いられることも可能であると結論づけている。この結論は、本研究のBCCWJ調査の結果からも支持されるものである。

2. 2 金子(1985)

金子(1985)では、話し言葉文字化資料から「する」624例、「やる」421例を抽出して分析し、①話し言葉の中で「やる」は95%が「ある行為を行う」³の意味で用いられる、②「やる」はヲ格名詞を省略して単独の形で使われやすい(金子(1985)の調査では56%の「やる」がヲ格名詞を省略して用いられている)ということが述べられている。

この2点について、森川・小山(2013)は、名大会話コーパスのデータを調査し、金子(1985)を支持することのできる結果が得られたことを報告している。

以上のような大塚(2002)、金子(1985)の研究成果を踏まえつつ、「名詞の一方」という文型をとるときの「する」「やる」という観点から、両語の違いをコーパスデータの中で観察し、分析することにする。

3. 「名詞のし方」「名詞のやり方」のデータと分析

3. 1 調査の方法

本研究は、データの収集に「現代書き言葉均衡コーパス」BCCWJを利用した。検索システムとして中納言Ver.1.1.0を使用し、検索対象をBCCWJの全データとして、次のa) b)の検索条件⁴を指定してデータを抽出した。

a) 「名詞のし方」の検索条件

品詞の大分類が「名詞」+語彙素「の」+語彙素「仕方」

b) 「名詞のやり方」の検索条件

品詞の大分類が「名詞」+語彙素「の」+語彙素「遣る」+語彙素「方」

³ 「やる」には「ある行為を行う」という意味の他に、「やりもらい」と「物を移動させる」の意味がある。森田(1989)や森山(2012)では、原義が「物の移動」で、そこから「やりもらい」そして「行為」へと意味が発展したと記述されている。

⁴ 単位の区切り方は文字列検索を参照した

その結果、収集できたデータの件数は表2の通りである。

表2 BCCWJにおける「名詞のし方」／「名詞のやり方」の出現件数

| | 総出現件数 | 出現した種類の総数 |
|------------------------|-------|-----------|
| a) 名詞のし方 | 2,812 | 897 |
| b) 名詞のやり方 ⁵ | 1,050 | 570 |

3. 2 データの分類

3. 1で収集した「名詞をする」「名詞をやる」のデータについて、名詞が「し方」「やり方」の動詞成分「する」「やる」とどのような格関係を結んでいるかという点から、次のi)～iii)のカテゴリーに分類してみた。その結果を下の表3に示す。

- i) 名詞が「する」「やる」のヲ格（対象格）の関係にあるもの
例：勉強をする → 勉強のし方 / 勉強をやる → 勉強のやり方
- ii) 名詞が「する」「やる」のガ格（主格）の関係にあるもの
例：わたしががする → わたしのし方 / わたしががやる → わたしのやり方
- iii) 名詞が「する」「やる」を修飾する関係（修飾格）にあるもの
例：昔した → 昔のし方 / 昔やった → 昔のやり方

表3 格関係による収集データの分類（値：出現件数）

| | 名詞のし方 | 名詞のやり方 |
|----------|---------------|--------------|
| i) ヲ格 | 2,783 (99.0%) | 440 (41.9%) |
| ii) ガ格 | 3 (0.1%) | 381 (36.3%) |
| iii) 修飾格 | 26 (0.9%) | 229 (21.8%) |
| 計 | 2,812 (100%) | 1,050 (100%) |

また、この分類結果を円グラフに表すと図1、図2のようになる。

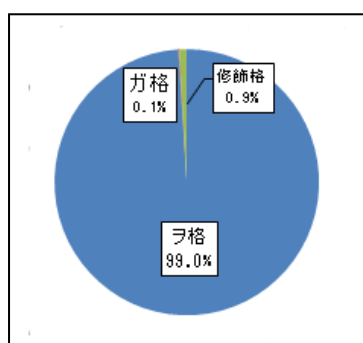


図1 「名詞のし方」のデータの格関係による分類

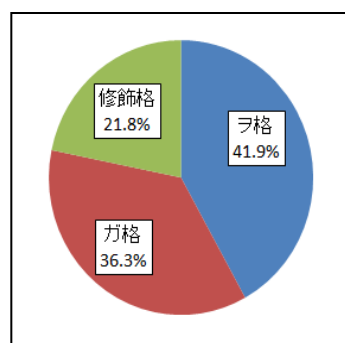


図2 「名詞のやり方」のデータの格関係による分類

⁵実際に検索した結果収集できた1060件のデータから、「水のやり方」4件、「肥料のやり方」3件、「ミルクのやり方」1件、「おっばいのやり方」1件、「目のやり方」1件の計10件を対象外のものとして除き、総出現件数を1,050件とした。

3. 3 ヲ格名詞と「し方」「やり方」

3. 2で「名詞のし方」と「名詞のやり方」のデータを対照した時、まずはヲ格名詞の占める割合の極端な差が目につく。そこで、どのような名詞が「し方」「やり方」とヲ格の関係を持って結びついているのかを詳細に見ておきたい。

「名詞のし方」では全体で 882 種類の名詞が出現し、そのうち頻度 5 以上のものは 123 種類、「名詞のやり方」では全体で 264 種類、そのうち頻度 5 以上のものは 9 種類である。頻度 5 以上の名詞を下の表 4 にリストアップする。このリストの中で、「名詞のやり方」のリストに出てくるもので「名詞のし方」のリストにもあがっているものには網掛け強調文字で示す⁶。

表 4 「名詞のし方」「名詞のやり方」に現れたヲ格名詞

| 出現件数 | 名詞のし方 | 名詞のやり方 |
|-------|--|-----------------------------------|
| 90～99 | 対応 96 | |
| 80～89 | | |
| 70～79 | | |
| 60～69 | 質問 61 | |
| 50～59 | 対処 55、計算 54、処理 54 | 仕事 55 |
| 40～49 | 表現 49、利用 46、 勉強 42 、説明 41、理解 41 | |
| 30～39 | 生活 35、筆算 34、 仕事 33 | |
| 20～29 | アプローチ 29、設定 28、解釈 25、評価 24、活用 23、運転 20 | |
| 16～19 | 掃除 18、食事 18、手入れ 17、 | |
| 15 | 運営 、学習、規定、行動、整理、把握、反応、 | |
| 14 | 化粧、検索、調理 | |
| 13 | 管理、梱包、紹介、存在 | |
| 12 | 運用、解決、認識、変化、保存 | |
| 11 | 挨拶、呼吸、作成、登場、表示、料理 | |
| 10 | 活動、 教育 、練習 | 経営 |
| 9 | 区別、結合、成功、注文、判断、分類、報道 | |
| 8 | あいさつ、記載、削除、出品、展開、返事 | 商売 |
| 7 | カット、介護、解凍、作業、指導、処分、操作、表記、剪定 | 政治 |
| 6 | PR、暗算、応援、解除、回答、監督、記述、記入、区分、形成、告白、手当て、接続、選択、注意、陳列、定義、提供、提示、配置、配分、分析 | 教育 、研究、 |
| 5 | アップ、アピール、コピー、プレー、メイク、応対、開発、確認、関係、祈り、決定、交換、交渉、子育て、出現、処置、 商売 、進行、説得、 調査 、調整、投資、答弁、発音、発生、発表、批判、保管 | 運営 、 調査 、 勉強 |

4. 結果の考察

3. 2で見た通り、BCCWJ に存在するデータにおいて、「名詞のし方」は 99%の名詞がヲ格名詞由来であるのに対し、「名詞のやり方」はヲ格名詞由来の名詞の割合は半数を割

⁶ 表 4 のリストに網掛け強調で示せなかった「経営」「政治」「研究」の「名詞のし方」の用例は、「経営」が頻度 3、「政治」「研究」が頻度 1 であった。

っていて、「ヲ格名詞：ガ格名詞：修飾格の名詞」の割合が約4：4：2となる。

この言語事実は、大塚(2002)金子(1985)でも述べられていた「する」の機能動詞性の強さと、「やる」の実質動詞的な性質を如実に反映しているものと考えられる。すなわち、「し方」だけでは実質的な内容を表すことができないのでヲ格名詞が必須となるが、「やり方」の方は単独で実質的な内容が表せるのでヲ格名詞は必須ではないということである。

さらに、ヲ格名詞について、表4のリストから以下のことが考えられる。それは、「名詞のし方」のリストに入った名詞群は図3のように分類することができて、それぞれの名詞のグループで意味的な特徴が見いだされるのではないかということである。

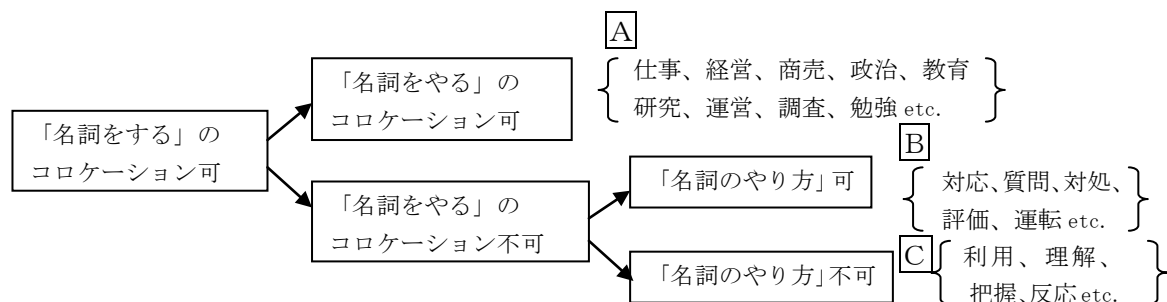


図3 「やる」「やり方」を基準にしたヲ格名詞の分類

この分類は内省に頼って行っており分類基準の実証性に乏しいが、**A**群は具体的な活動を表す名詞、**C**群は自発的／自動詞的变化あるいは自己内で完結する認知的な活動を表す名詞で、**B**群は**A**と**C**の中間的な性格を持つものではないかと推測できる。**B**群は、「する」とは結びつくが「やる」とは結びつくことはない。が、その「やり方」は云々することができるというものであり、興味深い存在である。

この「やる」「やり方」を基準とした分類法について、たとえば、

- ・勉強のし方が分からないんです。どうやって勉強したらいいか、(し方 / やり方) を教えてください。

のような語彙を分類するためのテストの枠組みを作ったとして、それが有効に働く物であるかどうか、また、「やり方」を問うことが出来るか否かというのが動詞のどのような意味特性によるものなのか、こういった点を明らかにすることは、本研究に残された今後の課題である。

5. 通時的な観点から見る「し方」と「やり方」

最後に、「し方」と「やり方」を通時的な観点から見ておきたい。「やる」(遣る)は古くは「物や人などを自分から遠い方へ移動させる意。」(小島(2001))であった。堀口(1984)によると、「やる」の用法が広がって「する」の代わりに用いられるようになったのは近世に至ってからであるという。

それでは、「名詞のし方」「名詞のやり方」という文型についてはどうだろうか。

このことを調査するために JapanKnowledge を用いて、『新編日本古典文学全集』を検索した。その結果、「やり方」(遣り方)は用例そのものが存在しなかった。また、「名詞のし方」については、「～の仕方」で検索したところ、近世の作品に11例、存在することが分かった。具体的には、以下のような用例である。

- ・与九「また折を見て、訴訟のしかたもあろう。…」([古典81]『東海道中膝栗毛』p.40)

- ・「死骸おしやり、刀を拭ひ、しづまゝしまうて立つたりし、武士の仕方のすゝどきよ」(古 典 75)『近松門左衛門集(2)』堀川波鼓 p.515)
- ・「段々功もゆき、歌学もせんと思ひ、この道に達せんとするときの仕方は、その時にはいかやうとも我が心にも合点もゆけば、学びやうあるべきことなり」([古典 82]『近世随想集』排蘆小船p.273)

このような「～の仕方」がヲ格 3 例、ガ格 3 例、修飾格 5 例と、少数ずつながら三つのタイプの格関係の用例が見いだされた。

つまり、「やり方」という言い方は近代以降に一般的に使われるようになった“新しい”言葉で、それゆえに、現代でも「し方」よりも「やり方」の方がインパクト強く響くのかかもしれない。

6. まとめ

以上、「名詞のし方」「名詞のやり方」についての BCCWJ データの観察を通して、この形式に基本動詞「する」と「やる」の本質的な違いが現れるということを確認した。「類義語 A と B の本質的な違いが顕著に表れる特定の形式は？」という観点からの類義語対照研究は従来、それほどされてこなかったのではないだろうか。コーパスデータを観察することから、ある語の本質的なイメージや際だった特徴が現れている「形式」を見いだすことができれば、日本語学習者にとってもそれは日本語の語彙を理解する上で非常にわかりやすい手がかりを提供できることになり、学習者のスムーズな語彙学習のために貢献することができるであろう。

文 献

- 大塚望(2002)「「する」と「やる」——非動作性名詞がヲ格に立つ場合——」『日本語科学 12』、pp.7-27、国立国語研究所
- 大塚望(2007)「「する」文の多機能性——文法的機能——」『日本語日本文学』第 17 号、pp.23-39、創価大学日本語日本文学会
(<http://libir.soka.ac.jp/dspace/bitstream/10911/2935/1/KJ00004859986.pdf> よりダウンロード可能)
- 大塚望(2012)「「する」文の格構造」『日本語日本文学』第 21 号、pp.33-48、創価大学日本語日本文学会(<http://libir.soka.ac.jp/dspace/bitstream/10911/3244/1/nn21-033.pdf> よりダウンロード可能)
- 金子比呂子(1985)「話し言葉における「する」と「やる」」『ICU 夏期日本語講座』、pp.105-126、国際基督教大学夏期日本語講座
- 小島聡子(2001)「やる(遣る)」(山口秋穂、秋本守英編『日本語文法大辞典』、pp.814-815、明治書院)
- 堀口和吉(1984)「動詞「やる」の一考察——「行^る」「演^る」の誕生——」『山邊道』第 28 号、天理大学国語国文学会、pp.31-49
- 森川結花、小山宣子(2013)「基本動詞「やる」を日本語教育の中でどう扱うべきか——「する」との比較を通して——」2012(平成 24 年度)『第 10 回日本語教育学会研究集会予稿集』、pp.25-28
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店
- 森山新編著(2012)『日本語多義語学習辞典 動詞編』アルク

関連 URL

JapanKnowledge <http://www.japanknowledge.com/top/freedisplay>